

〔研究ノート〕

擬プルタルコス 『子どもの教育について』の教育観

鈴木 円

1. はじめに

擬プルタルコス (pseudo-Plutarchus) の『子どもの教育について』は、ルネサンス期から18世紀にかけて、多くの文人に影響を与えてきた作品であり、古代ギリシアの教育論として唯一のまとまった著作であるが、19世紀以降あまり省みられていない。我が国において、「教育」のかたちそのものが問い直されている現在、西欧思想のなかで「教育」がどのようなものとして捉えられていたかの一端を、西欧思想の源泉である古典作品から明らかにすることも、これからの教育を考える上で意味のあることではないかと考える。

2. プルタルコスと擬プルタルコス『子どもの教育について』

2.1. プルタルコス (Plutarchus)

プルタルコスの生年没年は、膨大な著作を著した彼自身も記しておらず、彼の伝記を記した者もないことから未だ明らかではないため、彼の書き残したのから推測するしかない状況である。生年は紀元50年以前のクラウディウス帝の治世、没年は紀元120年以降ハドリアヌス帝の初年と推定されている。したがって、彼の活躍年代は、いわゆるローマの平和 (Pax Romana) の時期に重なっている。彼の家は、カイロネイアの裕福な家であった。教育はアテネで受けており、プラトン学派のアカデメイア学頭アンモニウス (Ammonius) を師と仰いでいる。彼は、ペリパトス派・ストア派・エピクロス派の思想や自然科学、宗教に広く通じている。エジプトやギリシア本土の諸所、イタリアに旅行した経験があり、ローマではローマの上流階級に尊敬され、多くの知己を得ている。トラヤヌス帝の信任も厚く、政治的な活動歴も認められるが、「彼の移住により、それだけ一層小さくなる」¹ 田舎町カイロネイアに生涯とどまった。また晩年デルフォイのアポロン神殿の最高神官になっている。彼の著作は、我が国では『英雄伝』あるいは『対比列伝』と呼び習わされている Βίαι / Vitae と、種々雑多な主題のものを寄せ集めた『倫理論集』あるいは『道徳論集』と呼び習わされている Ἠθικά /

1 Plut., *Dem.* 2. 「歴史の著作を企てるものが、手許や自分の家にある書物によらず様々な外国の書物、他の人々のところに散在している記録によって求めようとする場合には、実際何よりもまず文化を愛し人口の多い『有名な町』にいて、あらゆる種類の書籍を豊富に持ち、作家の目を逃れて人々の記憶のうちに一層明白な信憑性を示しているすべての事柄を耳で聴き問い質した上で、多くの必要な事実を洩らさないような著作を公にしなければならない。私は小さな町に住んでいて、私がいなくなると人が一人少くなるから愛する町のために留まっているが、ローマを始めイタリアの方々の町にもいたことがあるけれども、政治上の要務や哲学の弟子たちの世話のため、自分ではラテン語を習っている暇がなく、ずっと後に年齢が進んでからローマ人の著作を読み始めたのである。」(河野)

Moralia のふたつに大別される。古代作家では、キケロと並んで多作な作家で、紀元4世紀に編纂されたとされているランプリアス (Lamprias) カタログでは227篇が彼の作品とされているが、そのうち現存するものは様々な主題のもの78篇 (そのうちランプリアスカタログにないものも含んで) と伝記が50である²。

2.2. 擬プルタルコス『子どもの教育について』

『子どもの教育について』(Περὶ Παιδῶν Ἀγωγῆς / *De Liberis Educandis*) は、ランプリアスカタログには載っていない。しかし、13世紀のプラヌデス (Planudes) の著作集においてはMoraliaの2番目に、1572年のステファヌス (Stephanus) 版においては、筆頭に位置している。この作品は、古くからプルタルコスの真作ではないとされてきた。16世紀にムレートゥス (Muretus) が疑問を投げかけ、17世紀のルアルドゥス (Rualdus) がそれに賛同している。18世紀のホイジンガー (Heusinger) は、再びこの作品の真正性を支持したが、19世紀初頭のヴィッテンバッハ (Wytttenbach) が、この作品を詳細に検討し、内容的、文体的、文法的な根拠からプルタルコスの作ではないとしてから、擬作であることは決定的となった。ヴィッテンバッハは、この作品について、おそらくは彼の弟子の一人の練習作品ではないかと思われるとしている³。しかし、マルー (Marrou) は、この擬作説について、「それほどうまく証明されているとは思えない」としている⁴。ビュデ版の注釈者のシリネリ (Sirinelli) は、プルタルコスの死後、親族か弟子が彼の残したメモや下書きをまとめて、他の論考に見られるプルタルコスの展開方法に似せて整理して作り上げたのではないかと想像している⁵。ウィラモウヴィッツ (Wilamowitz) は、この作品について、それほど重要でない駄作であるが、数多くの古き良き思想が埋め込まれていると評価している⁶。

この作品は、現存する唯一完全なギリシアの教育についての論文であり、著者の凡庸さにもかかわらず、このテーマに関する多くの価値の高い古代の思想を伝えているという事情から、すでに後期ビザンツ時代には異例なほどに愛好されていた⁷。ただし、この作品における教育は、「固有の意味の教授」よりも「品性の陶冶」にかかわって述べられており、学校教育に触れている部分は少ない⁸。

3. Moralia 及び『子どもの教育について』の伝承過程の概略⁹

1290頃 Planudes, 全集を計画 (Z, K)

1295 Planudes, 69篇を自身で校訂した写本から弟子たちに写させて一定の順序に並べ、縁書と訂正を書き加えたものが今も残る (ミラノ アンブロシアーナ図書館蔵) (Z, K)

2 OCD, pp. 1200-1201. et Ziegler.

3 Ziegler, col. 174.

4 マルー, p. 463.

5 瀬口, p. 295 et Sirinelli, pp. 27-28.

6 Ziegler, col. 174.

7 Ziegler, col. 175.

8 マルー, p. 181.

9 Ziegler, Sirinelli, 河野「後世の影響と本文の沿革」(『プルターク英雄伝(十二)』岩波文庫所収), 瀬口「解説」(『モラリア1』西洋古典叢書所収)をもとに作成。それぞれ, Z, Si, K, Seと表記。

- 1296 Planudes, パリ本 16715 (パリ国立図書館) (Z, K)
- 14 世紀 Planudes, パリ本 16725 (パリ国立図書館) (Z, K)
* Maximos Planudes, 「私の念願は、プルタルコスの本を写すことだ。この人柄に惚れ込んでいる。」 (Z, K)
- 1410 Guarino da Verona, ラテン語に翻訳 (Z, K, Si)
- 1450 Piccolomini, *Tractatus de Liberos Educatione*. プルタルコスの『子どもの教育について』を引用 (Z, K)
- 1471 ラテン語訳出版 (Si, Se)
- 1508 Iohann Pfeyffelman, 独訳 (Si, Se)
- 1509 ヴェネツィアの印刷者 Aldus Manutius がクレータの人 Demetrios Ducas とロッテルダムの Erasmus の監修の下に、偶然親本が手に入った順に従って *Moralia* (ギリシア語) を刊行 (Z, K)
- 1519 Melanchthon, 『児童教育論』を刊行して、その序文で著者を激賞 (Z, K, Si)
- 1529 Erasmus, *De Pueris Statim ac Liberaliter Institvendis*. (*educandis* Si, Se)
- 1532 Thomas Elyot, 英訳 (Si, Se)
- 1538 Jean Collin, 仏訳 (Si, Se)
- 1548 Juan de Brocar, 西訳 (Si, Se)
- 1559 Muretus, *Var. Lect.* XIV 1. プルタルコスの作であることに疑問を投げかける (Z, K)
- 1572 Stephanus 版刊行 (Z, K)
- 1572 Amyot, 仏訳 *Moralia* 刊行 (Z, K)
- 1578 Fischart à Strasbourg, 独訳 (Si, Se)
- 1624 Rualdus, *Vita Plutarchi* cap. XX p. 41 (1624). Muretus に賛同 (Z, K)
- 1644 Milton, *De Liberis Educandis*. を重視 (Si, K)
- 1719 Rousseau, 『英雄伝』を愛読¹⁰ (Z, K)
- 1749 Heusinger, *Praefatio seiner Sonderausgabe*. において真正説 (Z, K)
- 1762 Rousseau, 『エミール』の第 1 巻と第 4 巻でプルタルコスに言及 (Si)
- 1766 Pestalozzi, 『アギス』刊行¹¹ (Z, K)
- 1820 Wytttenbach, *Moralia-Ausgabe* I 29-156, *Animadvers.* において、擬作説 (Z, K)

10 「ルソーもギリシア語は全然知らなかった。しかし彼はラテン語は知っていた。彼は驚くほど多くのラテン作家を原典や翻訳で読んでいた。しかし彼に最も深い影響を与えたのは、プルタルコスであった。彼が『英雄伝』をアミヨの名訳で読み始めたのは 6 歳のときであった。8 歳の時にはもう「これを諳んじていた。」彼はプルタルコスの『倫理論集』も勉強した。ヌーシャテル図書館には彼の備忘録も保存されているが、そこには彼が『人間不平等起源論』を書くかわら、プルタルコスの書物のここそこについてのちょっとした覚え書きや抜き書きをしたのなどが 50 頁以上もある。」「ルソーがプルタルコスの特にすばらしいところだと思っていたのは共和政ローマの初期の歴史であり、またそれ以上にスパルタの法律と道徳に関する部分であった。」(ハイエット, 下, p. 146)

11 Ziegler は、ペスタロッチが若き日の著作『アギス』において、プルタルコスの『英雄伝』からインスピレーションを得ているとしている (Ziegler, col. 320.)。

* G・ハイエット (Highet) のプルタルコス評価

「プルタルコスの著作、特に『英雄伝』は、そこに示された道徳的理想主義—それは究極的にはギリシアの偉大な教育原理たるパイデアの思想であった—によって、多くの 18 世紀の読者に感銘を与えた。プルタルコスが扱った英雄の生涯を主題とした悲劇が書かれた。プルタルコスが説明している制度に倣って新制度が作られた。若い人たちは男も女も自分がギリシアやローマの昔に生きているつもりになった。そしてそれが彼らにとってはよいことであった。ブリソ (1754-93) は「何とかポキオンのようになりたいものと胸を燃した。」ロラン夫人 (1754-93) は「スパルタ人としてあるいはローマ人として生まれなかったことを泣いた。」シャルロット・コルデ (1768-93) はマラ (1743-93) を暗殺する前に、その日はプルタルコスを読んで過ごした。18 世紀にプルタルコスが新しいものを生む原動力を与えたことに関しては、重要な書物が書けるし、また書かるべきである。一人の哲学者がこれほど時間空間を距てた所で教育上道徳上にこれほど強い影響を与えた例はそうざらにはない。」(ハイエット、下、p.148)

4. 『子どもの教育について』の概要

本作品は、Loeb 版のページ数で、原文 33 ページの小品である。全体は 20 節に分けられている。以下にその概要を示す¹²。

- 1 自由人にふさわしい子どもの教育について、まじめな性格を備えた者となるために必要なことは何かを考察することを記す。
- 2 子どもの生まれについて。遊女や妾といった行きずりの女性とは一緒になってはならない。家柄が立派でないと拭い去れない汚点が一生涯ついてまわる。生まれのよさは、自由にものが言えるという美しい宝である。
- 3 酔っ払って子どもをこしらえてはならない。
- 4 徳に関して、完全に正しい行いをするためには、三つのことが集まらねばならない。素質 (ピュシス: φύσις) と理 (ロゴス: λόγος) と習慣 (エトス: ἔθος) である。ここでのロゴスとは学び (マテシス: μάθησις) であり、エトスとは訓練 (アスケシス: ἀσκησις) である。ピュタゴラスやソクラテスやプラトンは、この三つがそろった人である。この三つがそろった人には、幸運と神の寵愛がある。もしピュシスにめぐまれていなくても、エトスによって欠けた素質を可能な限り補うことができる。教育はより劣った素質を矯正する。
- 5 養育 (トロペー: τροφή) について。子どもを生んだ母親が授乳し、食べ物を与えるべきである。もしそれが不可能ならば、よくよく吟味してできるかぎり真面目な、ギリシア人の品性にかなった乳母や子守を雇うべきである。生まれてからすぐに最初から子どもの性格を鍛えることが適当である。
- 6 子どもと生活を共にする若い召使の子を選ぶ場合には、性格が真面目でギリシア語の話し方にすぐれている者を選ばなければならない。
- 7 子どもが養育係 (パイダゴース: παιδαγωγός) にゆだねられる年齢になったなら、うかつに戦争奴隷や蛮族や信頼できない者を養育係にしてはならない。アキレウスの養育係であったポイニク

12 この概要は、Loeb 版テキストと、瀬口訳「子供の教育について」、及び、河野「『倫理論集』各篇の梗概」(『プルターク英雄伝 (十二)』岩波文庫所収) を利用して作成した。

スのような素質をもつ者でなければならない。教師（ディダスカロス: διδασκάλος）を探すにあたっては、生活において非の打ち所がなく、性格において非難の余地がなく、経験において最上の者を選ぶべきである。なぜなら、規範的な教育を受けること（τὸ νομίμου τυχεῖν παιδείας）が善美（カロカガティア: καλοκαγαθία）の泉であり根であるからである。

- 8 簡潔に述べると、始めにおいても中間においても終わりにおいても肝心なのは、真面目な導きと規範的な教育（ἀγωγή σπουδαία καὶ παιδεία νόμιμος）である。そしてそれらが徳と幸福に導く。教育（パイデアー: παιδεία）だけが我々にとって不死であり、神的である。
- 9 誤りのない健全な教育を保持すべきであり、これ見よがしの戯言からは息子たちを遠ざけるべきである。大衆を満足させるものは知者には不愉快である。無教養な大衆に歓迎されるような語り方を実践する者は、生活において不品行で快樂好きである。ある年齢に達するまでは、即興の演説をすることは適切ではない。細かなことにこだわる言葉遣いや粗野な言葉遣いは避けるべきである。向こう見ずであることも臆病でびくびくしていることもふさわしくない。万事、中間の道を行くべきである。
- 10 自由人の子どもには、いわゆる一般基礎教育（エンキュクリオス・パイデウマ: ἐγκύκλιος παιδεύμα）のどの分野にも無知であることを許してはならない。これらは通過するものとして学ぶものであるが、これに対して、哲学（ピロソ피아ー: φιλοσοφία）を第一のものとしなければならない。医術は健康を、体育術は体力を身体のうちにも生み出す。しかし、魂の病や異常については哲学のみが唯一の薬である。人間にとって可能な限り完全に近づくのは、政治的能力と哲学とを混ぜ合わせて調和できる者である。できるかぎり公共の実務に励み、機会が許す限りにおいて哲学にいそむべきである。
- 11 身体の鍛錬について。子どもたちを体育教師の下に送って十分に鍛えなければならない。それは身体の優美さのためであると共に身体の頑強さのためである。子どもときの身体の丈夫さが健やかな老年の基礎となる。しかし、身体の訓練は、子どもたちが疲れのためにやる気を失い、教養教育の学習をあきらめない程度に制限しなければならない。
- 12 子どもは、励ましと道理によって立派な行為をするよう導くべきで、殴ったり虐待したりしてはならない。叱責と賞賛は交互に様々な方法で用いるべきである。過度な賞賛はいけない。
- 13 父親が熱心さのあまり、子どもがあらゆることですぐさま一番になることを望み、過度の課題を与えてしまうと、子どもはできなくて逃げ出してしまい、学習を受け入れなくなってしまう。我々の人生すべてが、ゆっくり休養するときと真剣に努めるときとに分けられることに留意すべきである。子どもの学習を養育係や教師にまかせきりにする父親も非難されるべきである。何にも増して、子どもの記憶力を鍛え習慣づけるべきである。なぜなら記憶は、いふならば教育の宝庫の如きものだからである。ムネモーシュネー（記憶の神）は、ムーサイ（学芸の神）の母であるという神話も語られてきた。素質において、記憶力が良い子どもも、記憶力が弱い子どもも共に鍛えなければならない。前者は他に抜きん出た者となり、後者は以前の自分よりも優れた者となる。
- 14 息子たちを下品な言葉から遠ざけねばならない。若者が従うべき行動規範は、質素な生活を送るよう努め、口を慎み、怒りを抑え、行動を制御することである。またすべてにまさって神聖な義務は、子どもに真実を語るように習慣付けることである。
- 15 同性愛については、それを認めるべきか否か判断できない。

- 16 子どものときよりも青年になってからのほうが、より注意と監督を必要とする。賢い父親は、この時期の青年には、教え、威嚇し、懇願し、快樂好きのゆえに不幸に陥った人や忍耐強さゆえに賞賛と名声を獲得した人の例をひいて説くべきである。名誉への希望と罰への恐れのみは徳の要素のようなものである。
- 17 一般的にあって、子どもたちを悪い人間との交わりから遠ざけるべきである。ピュタゴラスもなぞを用いて説いている（ピュタゴラス (Pythagoras) の言説の引用と説明）。
- 18 父親が完全に厳格であってはいけない。自分自身がかつて若かったことを思い出して、多くの場合、若い者の過ちを許し、時に怒っても後までこだわらないようにするべきである。
- 19 快樂にあらがうことができず、忠告にも耳を傾けない若者には、身分にかなった結婚が、最も確かなくびきである。
- 20 父親は間違った行動をしてはならず、子どものよき手本とならなければならない。これまで述べてきた勸告を完全に理解して行うことは祈りに近く、その多くを追い求めることでさえ幸運と配慮を必要とすることではあるが、それは人の力で達成できることである。

5. プルタルコス教育観をめぐるいくつかの問題

5.1. 標題について

* 標題の「教育」という言葉が、*ἀγωγή* (アゴーゲー) となっているのはなぜか？

5.1.1. 標題は、作品冒頭の文からとられている。

Τί τις ἂν ἔχοι εἰπεῖν περὶ τῆς τῶν ἐλευθέρων ἀγωγῆς καὶ τίνοι χρώμενοι σπουδαῖοι τοὺς τρόπους ἂν ἀποβαῖεν, φέρε σκεψώμεθα.

(自由人の教育 (アゴーゲー) について何を語ることができるのか、そして、性格において健全さを備えた者が何によってそうなるのか。さあ考えてみよう。)

5.1.2. ギリシア語で教育を表す言葉は、養育という意味では *τροφή* (トロペー) が、教育という意味では *παιδεία* (パイディア) が使われることが多く、本作品でもそのようになっている。本作品では、*ἀγωγή* (アゴーゲー) は、彼の述べる教育全般を総称して使われているように見えるが、この用法はプラトン (Platon) やアリストテレス (Aristoteles) とは異なるように思える¹³。一方、このアゴーゲーという言葉は、スパルタにおける組織的な公教育を指す言葉でもある。プルタルコスの『リュクルゴス伝』もしくは、クセノフォン (Xenophon) らの伝える、スパルタにおける制度的な訓育の在り方が作者の念頭にあったかのかもしれないが、本作品が、スパルタの教育観に完全に依拠しているわけではなく、その影響は限定的である¹⁴。

13 Pl., *Leg.* 659d. 「教育 (*παιδεία*) とは、法律によって正当と告示された理、また老齡の有為な人物から、その経験に照らし、真に正当なりと認められた理、そういう理へ子どもたちを誘い導く (*ὀλκή τε καὶ ἀγωγή*) ことにほかならない」(森ほか)。Arist., *Eth. Nic.* 1179b31-32. 「徳への正しい導きを若い頃から受けること (*ἐκ νέου δ' ἀγωγῆς ὀρθῆς τυχεῖν πρὸς ἀρετήν*) は、そのような法律によって養われているかぎり (*μὴ ὑπο τοιοῦτοις τραφέντα νόμοις*) 困難である」。

14 Berry は、本作品に対するクセノフォンの諸著作からの影響を重視している。

5.1.3. ラテン語の標題は、*De Liberis Educandis* となっており、educare が使われていることも示唆的である¹⁵。なお、本作品の影響を強く受けているエラスムス (Erasmus) の児童教育論の標題は、*De Pueris Statim ac Liberaliter Institvendis* であり、educare ではなく、instituere が使われている。

5.2. 「生まれのよさ」について

*教育を語るに際して、プルタルコスが「生まれのよさ」をどのように捉えているだろうか？

2. おそらく最初に、子どもの出生からはじめるのがよいでしょう。ところで、わたしとしては、誉れ高い子の父親になりたいと願う者には、行きずりに出会うような女とは一緒にならないように忠告します。わたしがここで言っているのは遊女や妾といった女のことです。なぜなら、母方であれ父方であれ、その家柄が立派でないと、低い身分の出自がもたらす消しがたい不名誉な汚点が一生涯つきまとい、あら捜しや侮辱をしようとする者たちの格好の材料にされてしまうからです。すると、次のように語る詩人は実に賢明でした。

一家の礎を正しく据えないならば、
子孫が不幸に遭うは必定。

したがって、生まれのよさは、何憚ることなく話せる自由という美しい宝であり、正嫡の子づくりを熱望する者は、そのことを最も大きな価値とみなさねばなりません。たしかに生まれがいがわしい卑しい者の心は、踏みにじられて辱めをうける定めにあるのです。詩人がそのことを正しく語り、次のように述べています。

たとえ恐れを知らぬ豪胆な者であっても
母や父の罪過を知れば奴隷のようなありさまになろう。

したがってもちろん、名高い両親をもつ子供の方は、大いに自慢と自尊心で満たされることとなります。とにかく、テミストクレスの息子クレオパンテスが多くの人たちに何度も述べたところによると、彼自身が欲することは何であれ、アテナイの民衆にもよいと思われたというのです。なぜなら、息子の彼が望むことを母親が望み、母親が望むことは何であれテミストクレスが望み、テミストクレスが望むことは何であれアテナイ人もこぞってそのことを望んだからです。また、自分たちの王のアルキダモスに罰金を科したスパルタ人の高潔さも大いに賞賛に値します。というのは、王がみずから背丈の低い小さな女と結婚することにしたので、自分たちに大王ではなく、小王を産み与えるつもりだとして、彼らは王の咎を申し立てたからです。(瀬口 筆者一部改訳 下線部筆者)

15 ルソーは『エミール』の冒頭で、ワロー (Varro) の言葉として、Educit obstetrix, educat nutrix, instituit paedagogus, ducet magister. (産婆はひきだし、乳母は養い、家庭教師は教え、教師は教授する) を引いている。同じ言葉を、イヴァン・イリイチ (Ivan Illich) はキケロの言葉として次のように言っている。「教育することは、教育学上の言い伝えが主張する「引き出すということ」とは語源的になにも関係がない。ペスタロッチはつぎのようなキケロのことばに注意すべきだったのだ。ラテン語では、educit obstetrix, educat nutrix すなわち、産婆が引き出し、乳母が育てる。男はそのどちらもしないのである。男は教えること (docentia) と指導すること (instructio) に従事する。」(イリイチ「ヴァナキュラーな価値」『シャドウ・ワーク』p. 113)

5.2.1. 本作品が、生まれから説き起こしていることに関して、イエーガー (W. Jaeger) は、クリティアス (Critias, fr. 32, Diels.) とクセノフォン (『ラケダイモン人の国制』1.4f) が紹介しているスパルタ人の国制に由来するよい生まれについての理想が紀元前4世紀の哲学的文学に大きな影響を与え、そして、プラトン (『法律』783b-785b) やアリストテレスが政治的理想としてそれを紹介しているため、本作品の作者らによる後世の教育についての著作はこれらに依拠していると指摘している¹⁶。

5.2.2. 作者は、生まれのよさの価値について、クセノフォンが『ラケダイモン人の国制』で指摘する、両親が健全であれば子どもが健全であるという身体的な側面よりもむしろ、プラトンが『法律』において触れている、風紀あるいは倫理的側面をより重視していると考えられる¹⁷。瀬口は訳注において、「このような出自の低さへの非難は、プルタルコス自身の考えには反しており、本書の『どのようにして若者は詩を学ぶべきか』28C-D, 35Eにおいて批判される見解である」(瀬口, p. 5)として、本作品がプルタルコスの真作ではないことの証拠としている。しかし、たとえ擬作であったとしても、プルタルコスから時代の離れていない時期にプルタルコスの著作や思想について知悉していたと思われる作者が、このようにプルタルコスと矛盾する見解を述べるとは考えにくい。そこで、生まれのよさに反する例として述べられる下線部の詩句を詳細に見ると、この詩句は、エウリピデス (Euripides) の『ヘラクレス』1261の詩句で、ヘラクレス (Heracles) がテセウス (Theseus) に対し、出生に関するわが身の不幸¹⁸を嘆く場面の詩句である。ヘラクレスは誉れ高きギリシア神話最大の英雄である。この英雄にして、生まれに悩まされるということになる。一方、生まれのよい例として、テミストクレス (Themistocles) の子クレオパントス (Cleophantus) があげられている。この人物は逆

16 Jaeger, III, p. 246.

17 Xen., *Lac.* 1.4. 「リュクルゴスは衣服を供給するだけなら奴隷女でも十分であると思っていたが、自由人女性には出産が最重要であると見なしていたから、まず女性も男性に劣らず身体を鍛えるように命じた。次に、彼は壮健な両親からはより健全な子供が誕生すると信じていたから、男性と同様に女性に対しても体力と走力を競いあう競技会を開催した。」1.6 「彼は、各人の希望するときに妻を娶れるということもやめさせ、身体の絶頂期に結婚するように指示した。が、これも丈夫な子供を生むのに役立つ、と彼が判断したからである。」1.7 「彼は、年とった男が若い女を妻にするようなことがあれば、そのような年寄りの夫は妻をとくに厳しく監視するということを知っていたから、この点でも反対の取り決めをした。つまり、彼は、年寄いた夫にその夫の賛美するような心身を所有する男性を家に迎え入れさせて、子供を生ませるようにしたのである。」1.8 「また逆に、妻とは夫婦生活をしたくないが、立派な子供は欲しいという男がいる場合、その男が子沢山で血筋がよいと分かっている人妻の主人を説得して、その人妻から子供を儲けてよいという法も彼は制定したのである。」(以上、松本)

Pl., *Leg.* 783d. 「新婚の夫婦は国家のためにできるだけ立派な、善い子供を生むことを心掛けなければなりません。」784e. 「法の定めるところに従って子供を設けた後に、もし男が妻以外の女性と、女が夫以外の男性と同様の関係を持つならば、相手がまだ子供をつくる年齢にある場合には、子供をつくる年齢にある人びとについて言われたのと同じ罰を与えるべきです。しかしその年齢を過ぎると、このような事柄に関して自制心のある男女は大いによい評判を受け、反対の者は反対の評判を、というかむしろ不評判をこうむります。」(森ほか)

18 アルクメネーに恋していたゼウスは、彼女の夫アムピトリュオーンの姿となってアルクメネーのもとを訪れ、姦をともした。その結果生まれたのがヘラクレスである。

に、凡庸な人物である¹⁹。このことから、作者は、生まれの良し悪しはその人物の優劣を決めるものではないことを読者に暗示しつつ、その人物の優劣に関わらず幸不幸が与えられる原因として生まれのよさを捉え、子どもをもうけるにあたっては正嫡の子をもうけるべきだと勧告していることがわかる。

5.3. 素質と教育について

* 素質と教育の関係はどのように捉えられているか？

4. 一般的に言えば、技術や学問に関してわれわれがいつも主張するのと同じことが、徳に関しても当てはまります。つまり、完全に正しい行為をなすためには、ピュシス [自然的素質] とロゴス [理] とエトス [習慣] の三つを共に働かせねばなりません (ὡς εἰς τὴν παντελῆ δικαιοπραγίαν τρία δεῖ συνδραμεῖν, φύσιν καὶ λόγον καὶ ἔθος.)。この場合にわたしは学びをロゴスと呼び、訓練をエトスと呼んでいます (καλῶ δὲ λόγον μὲν τὴν μάθησιν, ἔθος δὲ τὴν ἀσκησιν.)。最初の始まりは自然的素質であり (αἱ μὲν ἀρχαὶ τῆς φύσεως), 次に学びによる進歩があり (αἱ δὲ προκοπαὶ τῆς μαθήσεως), そして練習して使い慣れること (αἱ δὲ χρήσεις τῆς μελέτης), これら三つのすべてがあって完璧になります。それらのいずれか一つでも不足すれば、その分に応じて徳が不完全なものになるのは必然です。なぜなら、学ばなければ自然的素質は盲目であり、自然的素質に不足すれば学びは欠けたものになり、そのいずれもがないなら訓練は徒労に帰するからです。ちょうど農耕において、まず第一に土地が肥沃でなければならず、次に農夫が賢明であること、そして種子がしっかりしたものでなければならぬように、それと同じ仕方でも自然的素質 (ἡ φύσις) は土地に、教師 (ὁ παιδεύων) は農夫に、そして言論による助言や勧告 (αἱ τῶν λόγων ὑποθήκαι καὶ τὰ παραγγέλματα) は種子に (σπέρματι) 似ているのです。これら三つのすべての要因が、万人から賞賛されている人たち、すなわち、ピュタゴラスやソクラテスやプラトンや永遠の名声を勝ち得た人々の魂のなかに、寄り集まり息を合わせて一つになっていることをわたしは高らかに主張できます。

これら三つのすべてを神々から与えられた者には誰しも、幸運と神の寵愛があります。しかし、もし人が自然的素質に恵まれなければ、徳をめざして正しい学びと訓練 (μαθήσεως καὶ μελέτης) を積んでも、欠けた自然的素質を可能なかぎり補うこともできないと考えるならば、おそらく大いに、いやむしろ、まったく誤っています。というのは、無関心は自然的素質のすぐれた点をすっかりだめにしてしまいますが、教育 (διδασχῆ) はより劣った自然的素質を矯正するからです。無関心であれば容易なことも逃してしまいますが、しかし、熱心な努力は困難をも征服します。熱心な努力と労苦 (ἐπιμέλεια καὶ πόνος) が、どれほど効果的で目標達成に役立つかは、その結果の多くに目をむけさえすれば理解できるでしょう。水の滴は岩を穿ち、鉄や青銅は手で触れられることによって磨り減らされ、労苦して曲げられてつくられた戦車の車輪は、たとえ何が起きても元の真っ直ぐな形にふたたび戻ることはありません。役者がもつ曲がった杖を真っ直ぐにする手立てはなく、自然に反していても労苦によってつくられたものは、自然に備わっ

19 Pl., *Meno.* 93d-e.では、クレオパントスが乗馬に巧みであったこと以外にはすぐれたところのない人物であったことを指摘している。Plut., *Them.* 18.「自分の息子が母親に我儘を言い、母親を通して自分にも我儘を言うのをからかって、お前はギリシャ人の中で一番力があると言った。それはギリシャ人の上に立つのがアテーナイ人、アテーナイ人の上に立つのが自分、自分の上に立つのがその子の母親、母親の上に立つのがその子だからである。」(河野) Plut., *Cat. Mai.* 8.「その息子が母親を通じていろいろな事を指図した時に、テミストクレスは言った。『アテーナイの人々は全ギリシャの人々を支配し、私はアテーナイの人々を、お前は私を、息子はお前を支配しているのだから、思慮のないのにギリシャ人のうちで最も多く持っているその権威を無暗に使わせないがいい。』」(河野)

たものにもまします (τὸ παρά φύσιν τῷ πόνῳ τοῦ κατὰ φύσιν ἐγένετο κρεῖττον.)。それでは、熱心な努力の力が示すのは以上のことだけででしょうか。いえ、そうではなく、それは数限りなくあります。本来は肥沃な土地であっても、世話をしなければ不毛な土地になります。自然本性上すぐれたものは、無関心によってなおざりにされれば、それだけいっそうだめにされます。しかし、必要以上に固く荒れた土地であっても耕してやれば、すぐに立派な作物を生み出すようになるでしょう。手入れを受けなければどのような樹であれ、ねじ曲がったり実りがなくなったりしないではすみません。しかし、正しい栽培の手入れを受ければ、実りがよくなりよく熟するようになります。それでは、同様な身体の力が、無関心と贅沢と悪い習慣によって、弱められ損なわれずにすむでしょうか。しかし、いかに生まれつきは弱くても(ἀσθενής φύσις)、運動をして(γυμνασασμένοις)訓練を積みば(καταθλήσασσι)、力が強くないことがあるでしょうか。(中略)なぜなら、性格(ἦθος)とは長く続く習慣(ἔθος)であり、性格の徳(τὰς ἠθικὰς ἀρετὰς)を習慣(ἔθικας)の徳と呼んでもそれは誤りとは思えません。これらのことについては、あと一つの例を用いることにして、さらに長く説明することはやめるとしましょう。

スパルタ人たちの立法家であるリュクルゴスは、同じ親犬から一緒に生まれた二頭の子犬を引き取り、互いにまったく異なる方法で飼育して、その一頭を食い意地の張った悪戯好きの犬にし、もう一頭を臭いの追跡で狩猟ができる犬にしました。そして、スパルタ人たちが一堂に会したあるときに、彼は次のように述べたのです。「スパルタ人諸君、徳に達するために決定的な影響力をもつのは、生活を導く習慣と教育と教えである(καὶ ἔθη καὶ παιδεία καὶ διδασκαλία καὶ βίων ἀγωγήι)。そこで、わたしは諸君に、ただちにそのことを明らかにしてみせよう」。そして、二頭の子犬を引き出して結びを解いて、子犬たちの真ん前に餌皿と野ウサギを置きました。すると一頭の犬は野ウサギめがけてさっと飛びかかりましたが、もう一頭の犬は餌皿にまっしぐらに駆け寄りました。スパルタ人たちは、彼がそのことによって何を言おうとしているのか、どのような意図で犬を見せたのか、まだ理解ができなかったので彼は次のように述べました。「この二頭はどちらも同じ親犬から生まれたが、異なる飼育を受けた(διαφόρου δὲ τυχόντες ἀγωγῆς)その結果、一頭は食い意地の張った犬になり、一頭は猟犬となったのだ」。習慣(ἔθων)と生活態度(βίων)については、以上で十分としましょう。(瀬口)

13. 何にもまして、子供の記憶力を訓練して習慣づけるべきです。というのは、記憶力はいかなれば子供にとっての宝庫であり、そのためにこそムネモシーユネー [記憶] が、ムーサ [音楽文芸の女神] たちの母であるという神話も語られてきました。その物語は、記憶ほど創造し育む本性をもったものはほかにないことを謎めいた仕方で暗示しています。それゆえ、子供が生まれつきの素質として、記憶力がよくても、その反対に忘れっぽくても、いずれの場合にも記憶力を訓練しなければなりません。なぜなら、生まれつきの素質が豊かな場合にはわれわれはそれを強化するでしょうし、不足している場合にはそれを補うことになるからです。そうすれば、前者は他の者たちよりすぐれた者になり、後者は以前の自分よりもすぐれた者になります(καὶ οἱ μὲν τῶν ἄλλων ἔσονται βελτίους, οἱ δ' ἑαυτῶν.)。(瀬口)

5.3.1. イェーガーは以下のように述べている。

いわゆる素質と教育の問題は、古代ギリシアにおいては、貴族的教育観と民主主義的理想との間の対立としてあらわれており、ソフィストたちはこの問題を追究し、すべての教育の基礎、すなわち性格形成における素質と教育との関係について研究した。その結論は、異なったしかたで表現されるにしろ、いつも同じである。自然(素質)(Πυσις: φύσις)が教育の土台であり、教育が完成されていく過程が、学習(マテーシス: μάθησις)あるいは教授(ディダスカリヤー: διδασκαλία)、及び学んだことを第二の自然にする訓練

(アスケシス: ἄσκησις) である²⁰。

(なお、訓練(アスケシス: ἄσκησις)は、練習(メレテ: μελέτη)と表現されていることもある。)

5.3.2. ここでは、本作品の素質と教育についての考え方の位置を明らかにするために、古代ギリシアにおける素質と教育についての考え方を概括的に振り返ってみたい²¹。

5.3.2.1. 最も貴族的傾向を示し、素質を重視するのが、抒情詩人ピンドロス(Pindarus / c.518-c.438 BC)である。

*Olympia II.86-88

詩人はおのが内から多くを知るもの(σοφὸς ὁ πολλὰ εἶδως φυῶ). いたずらに学をつむものは(μαθόντες δὲ λάβροι), 声いやすい鳥のように口々に濁った言葉をゼウスの貴い鳥に吐きかける。(久保)

*Olympia IX.100-102

天賦のものこそすべてにまさる(τὸ δὲ φυῶ κράτιστον ἄπαν). おおくの人びとは習いおぼえた手練によって(πολλοὶ δὲ διδασκταῖς ἀνθρώπων ἀρεταῖς), 英雄たらんと努力する。だが神なくしては、いかなるものも輝きなく、うたわれずとも影をますことはない。なぜならば、ある道は他の道よりも遠くにはしり、おなじ努力がわれらすべてを養う糧ではないからだ。詩の道はけわしい登り道、このほまれの歌を手にしさげ、高らかに力をこめて叫ぶがよい。この男子は神の寵あついで、たくましい腕、柔軟な四肢、雄々しい風貌にめぐまれて、いまオイレウスの子を祝う饗宴で、アイアースの祭壇に勝利の冠をささげている、と。(久保)

5.3.2.2. 喜劇詩人エピカルモス(Epicharmus / c.540-c.450 BC)も、素質重視の立場である。

*DK23B40

一番は素質をもつこと、学習は二番(φύσιν ἔχειν ἀριστόν ἐστι, δεύτερον δὲ <μανθάνειν>.)。(廣川)

5.3.2.3. 七賢人のひとりペリアンドロス(Periandrus / ?-c.586 BC)は、練習を重視している。

*Diogenes Laerutius I. 99

彼の格言は「練習こそすべて(Μελέτη τὸ πᾶν.)²²」である。(廣川 筆者一部補訳)

5.3.2.4. 原子論で有名な自然哲学者デモクリトス(Democritus / c.460-c.370 BC)と、ソクラテスの教えを受け三十人政権の首領格であったクリティアス(Critias / c.460-c.403 BC)とは、練習・訓練重視の立場である。なお、デモクリトスには、素質と養育を同列にみる考え方も見られる。

*DK68B242 (Democritus)

素質によって(ἀπὸ φύσιος)よりも訓練によって(ἐξ ἀσκήσιος)善き人となる者はより多い。(廣川)

*DK68B183 (Democritus)

同じ人〔デモクリトス〕のことば。「或る場合には若者たちに知があり、老人たちに無知がある。というの

20 Jaeger, I, pp. 305-306.

21 古代ギリシアにおける素質と教育については、廣川(1990) pp. 41-64 に詳細に分析されているが、ここでは、そこで例示されている古典資料をはじめとする諸資料にあたってうえて再検討してみたい。

22 Practice makes perfect. (Hicks)

も時間は思慮することを教えず (χρόνος γὰρ οὐ διδάσκει φρονεῖν), むしろ時宜にかなった養育と素質 (τροφή καὶ φύσις) がそれを教えるのだから」(高橋)

*DK88B9 (Critias)

素質によって (φύσεως) よりも練習によって (ἐκ μελέτης) 善き人になった者はさらに多し。(廣川)

5.3.2.5. 本作品の作者がその詩句をしばしば引用している悲劇作家エウリピデス (Euripides / c.485-406 BC) は、素質重視の立場に疑問を呈している。

*Hecuba 592-599

不思議なことではないか、不毛な土地も天候に恵まれればよい収穫をもたらす肥沃な土地も必要なものが与えられなければ不作となる。しかしこと人間に関しては、劣等な者は常に劣等であるし、優等な者は優等なまま、災いに襲われてもその資質 (φύσιν) は曲ることがなくいつまでも秀れたままなのだから。
〔これは親の血のせいかな、それとも育て方 (τροφαί) の問題であろうか。しかしきちんと育てられさえすれば、善いこととはなにかわかってくる (δίδαξιν ἐσθλοῦ)。それがしっかり身につくのであれば (τοῦτο δ' ἦν τις εὖ μάθη), 人間、今度はそれを基準にして何が恥すべきことかぐらいは分かるもの。〕²³ (丹下)

*Supplices 911-917

人は立派な教育を受けて、恥を知る気持を備えるもの (τὸ γὰρ τραφῆναι μὴ κακῶς αἰδῶ φέρει)。正しい生き方を学んだ者 (τάγαθ' ἀσκήσας ἀνήρ) は誰でも、卑劣な行為を潔しとしないものだ。とにかく幼い子供でさえ、理解の範囲を超えた事柄でも、これを話したり聞いたりするのを覚えるのであるから、所を得た勇気とは何かということも教えられて身につくのだ (ἢ δ' εὐανδρία διδασκός)。人が学んで得たものは (ἂ δ' ἂν μάθη τις), 老年に到るまでこれを忘れずにいるのであるから、子供には立派な教育をつけさせるがよい (οὕτω παῖδας εὖ παιδεύετε)。(橋本)

5.3.2.6. ヒポクラテス (Hippocrates / c.460-c.375 BC) は、医学知識の修得に必要な諸条件を素質、教え、環境、幼児からの訓育、勤勉、時間とし、わけても素質を重要であるとしている。また、医学知識の習得に関して、植物の成長(農耕)をメタファーとして用いている。

*Lex 2

医学の知識を真に修得しようとする者は、以下の事情に恵まれなければならぬ。すなわち、素質 (φύσις), 教導 (διδασκαλίας), 適正な環境 (τόπου εὐφύεος), 幼時からの訓育 (παιδομαθίας), 勤勉さ (φιλοπονίας), そして時間 (χρόνου) である。わけても第一に素質が求められる (πρῶτον μὲν οὖν πάντων δεῖ φύσις)。もし、素質に反していたら、すべては無駄になる。(廣川 筆者一部補訳)

*Lex 3

大地のなかで成長するもの(植物)について観察されることが、医術の学習 (μάθησις) について認められる。われわれの素質 (φύσις) は土壌 (χώρη) にひとしい。教師の理論 (τὰ δόγματα τῶν διδασκόντων)

23 丹下は訳注で「人間の価値は生れ(資質)によるものか環境(教育)によるものか、という議論はこの当時のアテナイで盛んに行われたものらしい。ただここでのヘカベーの哲学者ぶりは、劇の筋とは些かそぐわない感じを与える。それへの批判も古来ある。しかしこれは新知識の洗礼を受けた詩人エウリーピデースの一種のディレッタントイズムだとも解されよう。劇中での突飛な合理的新知識の披瀝はこのほかにも少なくない」と記している。

は種子（σπέρματα）にくらべられる。幼児からの訓育（παιδομαθίη）は、耕された土地に折りよく種をまくことにくらべられ、学習の環境（ὁ τόπος ἐν ᾧ ἡ μάθησις）は、芽吹いたものにそれを取り巻く空気から与えられる滋養に例えられ、勤勉（φιλοπονίη）は土壌の耕作（ἐργασίη）で、時間（χρόνος）はこれらすべてに力を与える。（廣川 筆者一部補訳）

* De Arte 9

能力は、十分な教育を受け、素質の豊かな者にそなわるのだ（δύνανται δὲ οἷσι τὰ τε τῆς παιδείης μὴ ἐκποδῶν τὰ τε τῆς φύσιος μὴ ταλαίπωρα）。（廣川）

5.3.2.7. イソクラテス（Isocrates / 436-338 BC）は、素質と訓練と教えについて、素質を第一としながら、訓練を重要視し、教え（教育）についてはその影響を限定的に捉えている。

* Antidosis 187-192

言論であれ、政治的行動であれ、また他の活動分野においてであれ、傑出する人の条件は、まず第一に選択した分野に関して素質がすぐれていること（πρῶτον μὲν πρὸς τοῦτο πεφυκέναι καλῶς）、第二は教育とそれぞれの事柄に関係する知識の獲得（ἐλεῖται παιδευθῆναι καὶ λαβεῖν τὴν ἐπιστήμην）、第三は知識の活用と実地経験の訓練を重ね、熟練すること（ἐντριβεῖς γενέσθαι καὶ γυμνασθῆναι）である。これらの条件が整ってはじめて、どのような活動分野においても、完成の域に達し、衆に抜きん出ることができるからである。教える側と学ぶ側のいずれも、それぞれ一方は必要な素質（τὴν φύσιν）に恵まれ、他方は才能豊かな者を教育する（παιδεῦσαι）実力があるのが望ましく、両者共通にいえることは、熟練するための稽古の場（τὸ περὶ τὴν ἐμπειρίαν γυμνάσιον）が必要である、なぜなら、一方は生徒を訓練監督し、他方はおのれに克って指示に従わなければならないからである。

以上は、すべての技術について言えることではあるが、いま他の仕事は措いて、言論の教育（τὴν τῶν λόγων παιδείαν）に最も貢献するのは何かを問われたとすれば、私は素質が圧倒的にすべての上位にある（τὸ τῆς φύσεως ἀνθρόβλητόν ἐστι）と答えるだろう。というのは、精神の能力において、発見と学びと刻苦精励、さらに記憶にすぐれ、声と言語が明晰で、語る内容だけでなく朗々たる声調によっても聴き手を魅了して説得できる人であれば、さらにその人が豪胆で（といっても厚顔無恥とは別の意味の、克己節制とともにある胆力のことであるが）、全市民の前で演説をするときも、ひとり思惟をめぐらすときに劣らず、いささかも臆することのない魂の持ち主であれば、このような人が精密高度な学問ではなく、広く一般的かつ常識的な教養にあずかるとき、かつてギリシアに例を見ない卓越した弁論家の生まれるだろうことを、誰が疑うだろうか。のみならずまた、素質は劣っても経験と修練においてまさることによって、以前の自分のみならず、才能に安住して自己鍛錬を怠った者をも凌駕した人のいたこともわれわれは知っている。したがって、素質と修練はそれぞれ、言論や行動において傑出した人材をつくりあげるが、この二つが同一人物に兼ね備わるならば、無敵の人が生まれるだろう。

さて素質と熟練について（περὶ μὲν οὖν τῆς φύσεως καὶ τῆς ἐμπειρίας）私の知ることは以上であるが、教育については（περὶ δὲ τῆς παιδείας）同じような説明が不可能である。教育の力は以上二つと似たものでもなく、同列に考えられるものでもない。言論に関係する事柄をすべて聴き、誰よりも精密に研究する人がいたならば、おそらく一般の人よりも洗練された言論の作り手にはなるだろうが、大衆を前にするときには、胆力が不足するというだけで、すでに声を発することもままならないだろう。（小池 筆者一部改訳）

* Contra Sophistas 14-15

言論だけでなく他のあらゆる活動において能力は、天性の素質と熟練のうちに生じる（ἐν τοῖς εὐφύεσιν ἐγγίγονται καὶ τοῖς περὶ τὰς ἐμπειρίας γεγυμνασμένοις）ものだからである。教育（παίδευσις）は、経

験を厭わない秀才の技術を磨き、よりすみやかに方途を見つけ出すことを可能にするにすぎない。これら逸材を相手にするならば、彼らがいま模索しながらたまたま見つける解決策を、着実にとらえることを教えることができるが、才能の劣る者を教えても闘いの巧者や言論の作り手に育成するのは至難の業であって、ただ以前の自分よりも向上させ、多くの点で思慮もすぐれたものにするだけである。(小池)

5.3.2.8. ソフィストの代表格であるプロタゴラス (Protagoras / c.490-c.420 BC) は、教育の前提として素質と訓練が必要としているが、教育そのものの価値をも重視している。

*DK80B3

『大演説』と題された著作において、プロタゴラスはこう述べた。「教育 (διδασκαλία) には生まれつきの素質 (φύσεως) と訓練 (ἀσπήσεως) とが必要」であり「人は若年から学び (μανθάνειν) 始めなければならない」、もし、エピクロスが『プロタゴラスについて』において言い、またそう考えていたように、プロタゴラス自身が晩学の人であったとしたら、こうは言わなかったであろう²⁴。(内山 筆者一部改訳)

5.3.2.9. プラトン (Platon / c.427-c.347 BC) の素質と教育の捉え方は多面的であり即断はできないが、素質を決定的なものとする立場を取りながらも、素質と教育の循環論ともいうべき考え方も提出されている²⁵。

*Res Publica III. 415a-415c (ポイニケの物語)

神は君たちを形づくるにあたって、君たちのうち支配者として統治する能力のある者には、誕生に際して、金を混ぜ与えたのであって、それゆえにこの者たちは、最も尊敬されるべき人々なのである。またこれを助ける補助者としての能力ある者たちには銀を混ぜ、農夫やその他の職人たちには鉄と銅を混ぜ与えた。

こうして君たちのすべては互いに同族の間柄であるから、君たちは君たち自身に似た資質の子供を生むのが普通ではあろうけれども、しかし時には、金の親から銀の子供が生まれたり、銀の親から金の子供が生まれたり、その他すべて同様にして、お互いどうしから生まれてくることがあるだろう。

そこで、国を支配する者たちに神が告げた第一の最も重要な命令は、次のことなのである。

——彼らがすぐれた守護者となって他の何にもまして見守らなければならぬもの、他の何よりも注意ぶかく見張らなければならぬのは、これら子供たちのこと、すなわち、子供たちの魂の中にこれらの金属のどれが混ぜ与えられているか、ということである。そして、もし自分自身の子供として銅や鉄の混ぜ与えられた者が生まれたならば、いささかも不憫に思うことなく、その生まれつきに適した地位を与えて、これを職人や農夫たちのなかへ追いやらなければならぬ。またもし逆に職人や農夫たちから、金あるいは銀の混ぜ与えられた子供が生まれたならば、これを尊重して昇進させ、それぞれを守護者と補助者の地位につけなければ

24 Pl., *Prt.* 325c-326e では、幼少期からの教育について詳述したうえで、「こういったさまざまのかたちの教育は、最も能力ある人々がこれを最も熱心に行ない、そして最も能力のある人々とは、最も富める人々にほかならない。だからそういう人々の子息たちは、最も早い年齢のときから先生のもとにかよいはじめ、最も遅くその手からはなれるのである」(藤沢) とある。また、327b-c には、すぐれた人物を父にもつ息子たちがしばしばつまらぬ人間になる場合が多いことの説明として、笛吹きを例えに用いて、「むしろ、誰の息子であろうと、笛を吹くための素質に最も恵まれているならば、そういう子供こそが長じてから名をあげ、素質がなければ名もない者となるというのが実際であろう。そして、すぐれた笛吹きの子が結局へたな笛吹きになるということも、へたな笛吹きの子がすぐれた笛吹きになるということも、ともにしばしば起ることであろう。しかしとにかく、笛吹きであるという点にかけては、彼らはすべて、笛を吹くことについて全然何も知らない素人とくらべれば、有能な笛吹きであることにまちがいないのだ」(藤沢) と述べている。

25 廣川 (1990) p. 55.

ならぬ。そのようにすることこそ、『鉄や銅の人間が一国の守護者となるときの国は滅びる』という神託を守るゆえんなのだ。(藤沢)

* Res Publica VI. 491e

われわれは魂についてもこれと同じように、最善の自然的素質に恵まれた (τὰς εὐφροσύνας) 魂は、悪い教育を受けると (κακῆς παιδαγωγίας τυχοῦσας), 特別に悪くなると言うべきではないだろうか? それとも君は、大それた悪事や完全な極悪非道というものが、凡庸な自然的素質から生み出されると思うかね? むしろそれは、教育によって損われた場合の力強い自然的素質からこそ生み出されるのであって、弱々しい自然的素質は、善・悪いずれにせよ、大したことの原因とはならないだろうとは思わないかね? (藤沢)

* Res Publica IV. 424a

国家のあり方というものは、いったんうまく動きはじめると、いわば循環的に成長しつづけて行くものだ。というのは、すぐれた養育 (τροφή) と教育 (παιδεία) が維持されるならば、それはすぐれた自然的素質 (φύσεις ἀγαθὰς) を国の内につくり出し、さらにそうしてつくり出されたすぐれた自然的素質は、同様の教育 (τοιαύτης παιδείας) をしっかりと保持してわがものとしつつ、前の世代の人々よりもさらにすぐれた生まれつきのものへと成長して行くからだ。(藤沢)

5.3.2.10. ソフィスト (詩人・弁論家) のエウエノス (Euenus / saec. V BC) とデモクリトス (前出) には、プラトンに類似した、素質と教育あるいは練習との循環論的考え方が見られる。

* fr. 9 (Euenus)

私は言う、友よ、習い (μελέτην) は長期にわたるものであり、さらに、人間にとってそれは最終的には自然本性 (φύσιν) となるのだ。(三浦)

* DK68B33 (Democritus)

自然本性と教育は似ている (ἢ φύσις καὶ ἡ διδασχὴ παραπλήσιον ἔστι.). というのも確かに、教育は人間を変容させるが、この変容により、それは自然本性を生み出す (φυσιοποιεῖ) からである。(三浦)

5.3.2.11. アリストテレスは、素質、習慣、教育に触れ、素質については天与のものであるから意のままにならぬとし、教育の前提としての習慣の重要性を指摘する。

* Ethica Nicomachea 1179b20-26

われわれが善いひとになるのは或るひとびとの考えでは、自然の本性によることであり、或るひとびとの考えでは、習慣によることであり、或るひとびとの考えでは、教育によることである (γίνεσθαι δ' ἀγαθούς οἴονται οἱ μὲν φύσει οἱ δ' ἔθει οἱ δὲ διδασχῇ)。さて、自然の本性によるものがわれわれにさづけられるのは、明らかに、われわれの意のままになることではなく、それは或る神的原因にもとづいて、本当の意味で幸運なひとにさづけられるのである。他方に議論や教育 (ὁ δὲ λόγος καὶ ἡ διδασχὴ) は誰にでも有効なものではなく、〔それが効果をもつためには〕聴講するひとの魂があらかじめ習慣により (τοῖς ἔθει) 陶冶され、ただしく好悪の情を持つように躰けられていなければならない。それは大地が種子を養うるためにはあらかじめ耕されていなければならないのと同じである。なぜなら、情念のままに生きているひと (ὁ κατὰ πάθος ζῶν) は行ないを改めさせようとする議論に耳を貸さないであろうし、また、かりに、耳をかしたとしても、理解しないだろうからである。このような状態にあるひとの意見を、いったい、説得によってどのようにして改めさせようというのだろうか。情念は、およそ、議論には屈せず、強制に屈するもの

であると考えられる。したがって、美を愛し、醜を嫌う、器量（τῆς ἀρετῆς）を獲得するに相応しい人柄があらかじめ何らかの仕方ですとにそなわっていなければならない。（加藤）

5.3.3. 紀元前5世紀から4世紀にかけての古代ギリシアの人々が、素質と教育に関して考えたことをまとめてみると、多くは、素質を教育すべての土台だと考えていること、いわゆる素質と教育の両者がそろってはじめて人間は徳を身につけ完全なものとなり得ると考えていること、さらに素質をそなえた者が正しい教育を受けることがなければ、その素質を損なうばかりか害悪にさえなると考えていることなどがあげられる。訓練あるいは練習が素質に勝るという考え方や、教育により第二の自然として優れた素質を生み出すことができるとする考え方もあるが、いずれも断片的である。

5.3.4. 本作品の素質と教育に関する考え方は、上記のような古代ギリシアの教育観をふまえて形成されている。しかし、作者の特徴は、古代ギリシアの教育観をただ踏襲するだけでなく、そこに新しい教育観への展望を開いているところにある。彼もまた、素質を教育の土台としてはいるものの、教育の力により強い信頼を置いている。教えが素質を矯正し、訓練すなわち努力や労苦によって教えを習慣となし習慣によって性格を形成することで、結果的には素質を補い、あるいは徳を身につけることができることを強調している。特に、教育の中でも、教えや学びによってではなく、労苦によって自然本性（素質）に勝ることができることさえ述べ（下線部）、作者が努力や労苦に対して強い信頼を置いていることがわかる。また、農耕のメタファー²⁶を用いるなかで、とくに教師を農夫に例えている点、「耕す」ことに重きを置いている点は、作者が教師の力を信頼している象徴であるとも捉えることができる。ただ、作者は、素質に恵まれた者を素質に恵まれない者が凌駕できると言い切っているわけではない。記憶力についてふれた箇所（13節）では、訓練によって、素質に恵まれた者は他の者たちより優れた者になり、素質に恵まれない者は以前の自分よりも優れたものになると言っている。ここに、「自然」（素質）に対する「人為」（訓練）の及び得る範囲についての作者の意識が表れているといえよう。素質と教育に関する新しい地平を開きつつも、素質を軽んじることはしていないのである。

6. まとめにかえて

西欧思想の源となっている古代ギリシアの教育観、その結節点ともいべき本作品の教育観を部分的にはあるが検討することで、民主主義社会の理想として、教育の力を信頼し、教育に価値を置く考え方が生ずるにいたる過程をわずかながら明らかにすることができたのではないかと考える。特に、いわゆる素質と教育の問題は現在においても解決されたわけではなく、素質という「自然」に対して、教育、さらに細かく言えば、教え（学び）と訓練（練習）という「人為」の及び範囲をどの程度と見るかという問題は、教育を考える上での根本的な問題のひとつであるにもかかわらず、現在の教育現場においては見過ごされがちなのではないだろうか。現代の教育思想における education の解釈にも関

26 イェーガーは、この農耕のメタファーがラテン語に訳されて西欧思想に入り、新しい *cultura animi* というメタファーを生み出すのを助けたと述べ、現代語の *culture* には、もともとのメタファーの明らかな影響が認められるとしている。さらに、のちの人文主義の理論のなかでこの思想は維持され、文明化され洗練された国家がその後、最重視するようになる知的文化の重要性を創造する助けとなったと述べている（Jaeger, I, p. 313.）。

わる問題であるが、子どもに無限の可能性が秘められており教育によってそれを引き出すことができるとする考え方や、教師や親が子どもの素質を見出すことが可能であり、それを発展させることが可能であるとする考え方には、古代ギリシア人たちは再考を迫るであろう。「以前の自分よりも優れた者になる」という可能性を、素質に関わらない教育の価値として見出した作者の謙虚な視点を、いま一度取り戻すべきではないだろうか。

引用・参考文献

〈原典〉

- Aristoteles, *Aristotelis Ethica Nicomachea*, recognovit brevis adnotatione critica instruxit I. Bywater, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis (Oxford, 1894).
- Diogenes Laertius, *Diogenes Laertius I*, translated by R. D. Hicks, Loeb Classical Library (Cambridge, MA, 1925).
- Erasmus, *De Pueris Statim ac Liberaliter Institutendis*, ed. Jean-Claude Margolin, *Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, ordinis primi tomus secundus (Amsterdam, 1971).
- Euripides, *Euripidis Fabulae*, recognovit brevis adnotatione critica instruxit Gilbertus Murray, tomus I, II, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis (Oxford, 1902 (I), 1913 (II)).
- Hippocrates, *Hippocrates II*, translated by W. H. S. Jones, Loeb Classical Library (Cambridge, MA, 1923).
- Isocrates, *Isocrates II*, translated by G. Norlin, Loeb Classical Library (Cambridge, MA, 1929).
- Pindarus, *Pindari Carmina cum Fragmentis*, recognovit brevis adnotatione critica instruxit C. M. Bowra, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis (Oxford, 1947).
- Platon, *Platonis Opera*, recognovit brevis adnotatione critica instruxit Ioannes Burnett, tomus IV, V, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis (Oxford, 1902 (IV), 1907 (V)).
- Plutarchus, *Plutarch's Moralia I*, translated by F. C. Babbitt, Loeb Classical Library (Cambridge, MA, 1927).
- Plutarque, *De l'éducation des enfants*, texte établi et traduit par Jean Sirinelli, Plutarque œuvres morales, tome I, 1^{re} partie, (Paris, société d'édition «Les Belles Lettres», 1987) (Budé).
- Xenophon, *Xenophontis Opera Omnia*, recognovit brevis adnotatione critica instruxit E. C. Marchant, tomus V, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis (Oxford, 1920).
- Diels, Hermann, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 8. Aufl. herausgegeben von Walther Kranz (Berlin, 1956, c1952).

〈邦訳等〉 * 原典引用に当たっては、以下の訳書等を利用させていただいた。なお、筆者が一部訳を改めた部分がある。また、引用に際して、漢字を「常用漢字表」による漢字に改め、仮名遣いを現代仮名遣いに改めたものがある。

- アリストテレス「ニコマコス倫理学」加藤信朗訳、『アリストテレス全集 13』(東京: 岩波書店, 1973年)
- イソクラテス「ソフィストたちを駁す」「アンティドシス(財産交換)」『イソクラテス 弁論集 2』小池澄夫訳, 西洋古典叢書(京都: 京都大学学術出版会, 2002年)
- エウリピデス「ヒケティデス」橋本隆夫訳、『ギリシア悲劇全集 6』(東京: 岩波書店, 1991年)
- エウリピデス「ヘカペー」丹下和彦訳、『ギリシア悲劇全集 6』(東京: 岩波書店, 1991年)
- エウリピデス「ヘーラクレス」内田次信訳、『ギリシア悲劇全集 6』(東京: 岩波書店, 1991年)
- クセノフォン「ラケダイモン人の国制」松本仁助訳、『クセノポン小品集』西洋古典叢書(京都: 京都大学学術出版会, 2000年)
- ピンドロス「オリュムピア祝捷歌集(全)」久保正彰訳、『世界名詩集大成 1 古代・中世篇』(東京: 平凡社, 1960年)
- プラトン「プロタゴラス」藤沢令夫訳、『プラトン全集 8』(東京: 岩波書店, 1975年)

プラトン「メノン」藤沢令夫訳、『プラトン全集 9』（東京：岩波書店，1974年）
プラトン「国家」藤沢令夫訳、『プラトン全集 11』（東京：岩波書店，1976年）
プラトン「法律」森進一・池田美恵・加来彰俊訳、『プラトン全集 13』（東京：岩波書店，1976年）
プルタルコス「子供の教育について」瀬口昌久訳、『モラリア 1』西洋古典叢書（京都：京都大学学術出版会，2008年）
プルタルコス『プルターク英雄伝』全12冊 河野与一訳，岩波文庫（東京：岩波書店，1952-1956年）
廣川洋一『ギリシア人の教育—教養とはなにか—』岩波新書110（東京：岩波書店，1990年）
内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』第IV・V分冊（東京：岩波書店，1997-1998年）（第IV分冊 デモクリトス著作断片訳者：三浦要・高橋憲雄・角谷博，第V分冊 プロタゴラス著作断片訳者：内山勝利）

〈その他の参考文献〉

Berry, Edmund G., The *De liberis educandis* of pseudo-Plutarch, *Harvard Studies in Classical Philology* 63, pp. 387-399, (Cambridge, MA, 1958).
Bloomer, W. Martin, The technology of child education: Eugenics and eulogics in the *De Libris Educandis*, *Arethusa* 39, pp. 71-99, (Baltimore, MD, 2006).
Jaeger, Werner, *Paideia: The Ideals of Greek Culture*, vol. I-III, translated from the German by Gilbert Highet, (Oxford, 1943-1945).
Ziegler, Konrat, *Plutarchos von Chaironeia*, (Stuttgart, 1964).
イリイチ, I. 『シャドウ・ワーク 生活のあり方を問う』玉野井芳郎・栗原彬訳（原書：Ivan Illich, *Shadow Work*, (London, 1981).）岩波現代文庫（東京：岩波書店，2006年）
河野与一「後世の影響と本文の沿革」『倫理論集』各篇の梗概『プルターク英雄伝（十二）』岩波文庫（東京：岩波書店，1956年）
寺崎弘昭・周禅鴻『教育の古層—生を養う—』かわさき市民アカデミー講座ブックレット27（川崎：かわさき市民アカデミー出版部，2006年）
ハイエット, G. 『西洋文学における古典の伝統（上）（下）』柳沼重剛訳（原書：Gilbert Highet, *The Classical Tradition: Greek and Roman Influences on Western Literature*, (Oxford, 1949).）筑摩叢書141-142（東京：筑摩書房，1969年）
廣川洋一『イソクラテスの修辞学校—西洋的教養の源泉—』（東京：岩波書店，1984年）
マルー, H. I. 『古代教育文化史』横尾壮英，飯尾都人，岩村清太訳（原書：Henri-Irénée Marrou, *Histoire de l'Éducation dans l'Antiquité*, (Paris, 1948).）（東京：岩波書店，1985年）
村川堅太郎編『プルタルコス英雄伝』全3冊 ちくま学芸文庫（東京：筑摩書房，1996年）
山本光雄訳編『初期ギリシア哲学者断片集』（東京：岩波書店，1958年）
高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』（東京：岩波書店，1960年）
The Oxford Classical Dictionary, ed. Simon Hornblower & Antony Spawforth, third edition revised, (Oxford, 2003).

（すずき まどか 初等教育学科）